

# 平成 30 年度入試の出題の意図・採点総評



北九州市立大学

## 一般選抜

外国語学部	.....	P 1
経済学部	.....	P 4
文学部	.....	P 7
法学部	.....	P11
地域創生学群	.....	P13
国際環境工学部	.....	P14

## 推薦入試

外国語学部	.....	P23
経済学部	.....	P24
文学部	.....	P25
法学部	.....	P28
地域創生学群	.....	P29
国際環境工学部	.....	P30

## A0 入試

外国語学部	.....	P37
地域創生学群	.....	P38



# 平成 30 年度入試の出題の意図、採点総評 《一般選抜》

## ◆ 外国語学部 前期日程（英語）

### <出題の意図・ねらい>

試験では高等学校卒業程度の基礎学力とともに英語読解力、英語表現力を判定する。

問題 1 は長文読解。長文を正確に読めるか問う。英語エッセイを読み、内容を正確に理解できているか（問 1）、“a few acts of kindness” が具体的に何を指すか正確に読み取れているか（問 2）、英文和訳の能力（問 3）を問う。

問題 2 は長文を読んで要約する問題である。英文がかなり複雑な箇所もあり、話の流れがきちんと把握できているかどうか、また英語がきちんと読みこなせているかを問う。

問題 3 は和文英訳。与えられた日本語の文を正確に英語に訳す力を問う。

問題 4 は和文英訳。与えられた日本語の文を正確に英語に訳す力を問う。

問題 5 は英作文。与えられた英文のテーマに従って、短いエッセイを英文で書く能力を問う。

### <答案の特徴と傾向>

#### 問題 1

問 1 問 1 は記号で答えさせる問題で全体的によくできていた。(1) の正解率は低かったが、(3) の正解率が高かった。

問 2 正答やそれに近い解答が多く、文章の内容や問いをきちんと理解している様子が伺えた。誤答で散見されたのは、『悪い企業』がオランウータンを守る取り組みを行わない、「(オランウータンを守る) 取り組みは結局うまくいかなかった」といったものであった。

問 3 全体的に良く答えられていた。不十分な答案としては、“from” 以下について、その前の部分との関係が読み取れていないものが多くみられた。

#### 問題 2

アメリカで起きた大規模な勘違いの内容を理解できている者が多かった。冒頭の段落と最後の段落をまとめた者が多かったが、逐語訳にとどまり、要約に至っていない解答も散見された。

#### 問題 3

不適切な語彙の選択が目立ち、英文法の基礎に従っていない解答や、正しい用法を反映していない解答が多く見られた。下線部中、一つ目と三つ目の文は意味が通じる英語に訳された解答が多かった。二つ目の文は日本語の元の意味がきちんと英語で表現された解答と、意味不明な解答に大きく分けられた。

#### 問題 4

基本的な文構造ができていない答案が目立った。例えば、「家族や恋人でさえも」という部分を全体の文構造の中で、正しく表現できた者は少なかった。多少意味が違っていても、正しい英語でおよその意味を表現できた答案が高得点となった。

#### 問題 5

答案の内容は受験生の自由だが、個人的な意見が根拠に基づいて説明されたかどうかの評価の主な基準の一つであった。表現力、語彙、文法を問われる問題で、定冠詞と不定冠詞の使い分け、単数形と複数形の用法、主語と動詞の一致、話しの展開なども評価した。

### ◆ 外国語学部英米学科 後期日程（小論文）

#### <出題の意図・ねらい><答案の特徴と傾向>

##### <問題 1 >

問 1 ほとんどの答案が、およその内容を理解しているようであったが、一方で具体的な詳細についての誤解が目立った。漠然とした理解ではなく、正確に全体を理解している答案が高得点を得た。

問 2 現行の時間帯を用いていることによる問題点、また時間帯を移動させることにより何が起こるかについて正確に把握した答案は少なかった。そのため自分の意見の理由づけの部分の記述が不十分な答案が多かった。

##### <問題 2 >

用いられている語彙が限られており、そのため特色のない答案が多かった。時制の選択が不正確であったり、一貫性がない、文の繋がりが悪く、文と文が自然に流れず、細切れになっているものが多かった。

### ◆ 外国語学部中国学科 後期日程（小論文）

#### <出題の意図・ねらい>

千野栄一氏の『外国語上達法』（岩波新書）より出題した。例年、問 1 は筆者の考えをまとめる問題、問 2 は自分の考えをまとめる問題が主な形式であるが、今回は問題文の内容が比較的易しいものであったことから、問 1 に「発音」に関する筆者の考えをまとめた上での自分の考え、問 2 にも母語と外国語習得との関連性について自分の考えをまとめる問題を出した。限られた時間内に一定の分量の文章を読み解き、指定された字数内にまとめることができるか、それに対する自分の考えを（賛成か反対かは問わない）、明確な根拠のもとに表明できるかを問う問題である。

問 1 外国語を上手に習得するのに重要な「発音」について、一定の分量の内容を指定された字数内にまとめることができるか、また、それに対する自分の考えを、明確な根拠やエピソードをもとに表明できるかを問う。

問2 外国語の学習や習得は、「ゴール」(目標)は意識されやすいが出発点(基礎)にはあまり焦点が当たらない。しかし、外国語の習得は母語(多くの受験生にとっては日本語)が基盤となっており、外国語によるコミュニケーション能力が母語のそれを上回ることはまずない。問題文は母語のマイナス面の影響が述べられていたが、母語が外国語の習得にプラスにはたらくこともある。母語と外国語、それぞれの重要性を簡潔にまとめた上で、母語が外国語の習得に与えるプラス・マイナス両面の影響について言及できるかを見る。本問は、この問いを通して、母語の重要性に今一度気づいてほしいという出題者から受験生へのメッセージでもある。

### <答案の特徴と傾向>

問1 大半の受験生は問題をよく理解し、きちんと筆者の考えをまとめたうえで、自分の意見を述べていたが、問題文の意味が理解できていない受験生も一定の割合でいた。特に「外国語の上手下手と、発音がいかに無関係に並存できるかというこのうえないよい例」のくだりの理解を間違っている解答が多くみられた。自分自身の考えについては、過去の経験などをもとに書かれた解答が多かったが、なんら根拠を示さないまま、ただ主張をするだけの解答や、エピソード(自らの過去の経験など)とその後の主張が結びつかない解答も少なからず見られた。

問2 半数以上の受験生は問題をよく理解し、外国語の習得に結びつけて、母語の重要性(外国語習得の基盤となること、思考の基礎として母語があること)、外国語の重要性それぞれについてまとめたうえで自分の意見を何らかの根拠をもとに表明していたが、半数近くの回答には、問題が理解できていないのか、以下のような特徴がみられた。

- ①外国語習得にはあまり関係のない母語と外国語の重要性について述べている。
- ②母語と外国語の重要性についてのみ述べていて、結論(自分の考え)が書かれていない。
- ③結論とそれまでの話の展開が結びついていない。よって結論に説得力がない。
- ④外国語の習得について、自分の考えというよりは、自分はこれからどのような方法で勉強していくかに重点が置かれている。

## ◆ 外国語学部国際関係学科 後期日程(面接)

### <面接の意図・ねらい>

後期日程の面接は、国際関係に対する問題意識と学習意欲を受験生自身の言葉で語ってもらいながら、自分の考えを口頭で的確に表現する能力をはかるとともに、円滑なコミュニケーションを遂行する力を有しているかどうかを確認するものであった。志望動機、大学での学習計画、高校時代の経験などに関する問いを投げかけ、受験生が過不足なく応答しているか、大学での学習に向けた準備をどのように進めているかを中心に、受験生の力を判断した。

### <受験生の特徴と傾向>

国際関係について関心を持ち、すでに一定の知識を有している受験生と、そうでない者との間に差があった。大学での学習に向けて、語学等の準備をしている者、海外への短期留学や外国人との交流活動等をおこなっていることを明確に示せる者と、そうでない者との違いもあった。日頃から幅広く書籍に接しているか、国内外のニュースに目配りしているかという点でも、様々であった。また、問いに対し受験生が言葉に詰ま

る場面はあまりなかったが、聞かれていることとは別の内容の発言をする者が散見された。意欲はあっても、表現力とコミュニケーション力に裏打ちされていなければ、それが十分には伝わらないことを感じさせる受験生もいた。

## ◆ 経済学部 前期日程（英語・数学）

### 《英語》

#### <出題の意図・ねらい>

##### I、II

基本的な文法の知識と語彙力を活用して、構文の意味を正しく解釈することができるか、文レベルでの接続関係を把握できているか、さらに、文脈を理解して筆者の見解や主張を正しく捉えることができているかを見る。

##### III、IV

与えられた日本語の文を適切な表現を用いて文法的に正しい英語に訳すことができるかを見る。

#### <答案の特徴と傾向>

##### I

###### 問1

“helpings”、“How about ～?”が理解できていない。

名詞句“helpings you piled on your plate”における修飾関係が理解できていない。

###### 問2

“appealing”を誤訳している答案が目立った。

###### 問6

“critical”、“struggle”、“FREE”の誤訳が多かった。

###### 問7

“strange but predictable”の“but”が正しく理解できていない。

何が“strange”で、何が“predictable”なのかを十分に理解したうえで解答している答案は少なかった。

##### II

###### 問1

文意をうまく理解できていない答案が過半を占めていた。

###### 問2

“humanities”を正しく理解できている答案は少数であった。

“decline by 9%”の“by”を正しく理解できている答案は3割から4割であった。

“share”を「株」と誤訳している答案が少数見られた。

問 3

“liberal arts”、“no longer”が正しく訳せていない。

問 4

“softer side”が正しく訳せていない。

III

「一時的に」を”contemporary”と誤訳している答案が散見された。

IV

“debate”、“analysis”、“analyze”、“overseas”、“features”、“characteristics”のスペルミスが多かった。

## 《数学》

### <出題の意図・ねらい>

本学の数学入試では、基本的な問題が出題されています。いわゆる難問は出題されません。基本的な定理や公式の理解力と論理的な思考力を試すのがねらいです。単なる暗記力や計算力よりも、問題の分析能力と的確な判断力や工夫する力を見るのがねらいです。また、出題の範囲に十分注意してください。

### <答案の特徴と傾向>

問題 1

(1)は数学的帰納法の基本的な問題です。このことに気づいた受験生は良くできていました。(2)は相加平均と相乗平均の関係です。全体的によくできていました。(3)の数列は最大になってから単調に減少します。このことを予測できた受験生は多いようでしたが、単調減少は(2)の結果を使って不等式を証明します。この部分の正答率はわずかでした。(4)(5)は対数と指数の公式を用いた計算です。正確にできれば簡単だったと思います。日頃から不等式証明や数学的帰納法などの基本的な証明方法に慣れておきましょう。

問題 2

微積分に関する問題です。(1)(2)は2次関数の接線を求め、その交点を求める基礎問題で、よくできていました。(3)は2次関数と直線の間の面積を求める問題です。問題を勘違いし積分範囲を間違っている答案が多少見られました。(4)も(3)と同じような問題なのですが、何を求めなければいけないのかが理解できていないように感じられる答案や、少し複雑な計算になり計算ミスをした答案が多く見られました。

問題 3

全体に出来は良くありませんでした。図形の性質を使って、計算を簡素化する練習もしておきましょう。(1)直線の式を描く基礎問題です。(2)は三角形の面積を求める基礎問題です。円周角の定理を使い、正三角形であることが分かれば容易に解けます。(3)は図を正確に描き、図形的な性質と三角比の相互関係を使えば解けます。(4)は座標の性質と三角関数の応用を利用します。正答率はごくわずかでした。

#### 問題 4

すべて確率を求める問題で、計算そのものは難しくありません。ただ、問題文中に多くの数値が出てくるので、それぞれの数値の意味を記号などを使って整理し、問題文の趣旨を理解していなければ解けません。そのためか、満点が多かった一方で零点も多く、出来不出来のばらつきが大きい印象でした。(1)(2)は、それぞれ独立である場合の積事象の確率や和事象の確率を求めればよく、(3)以降の前提となる基本的な問題ですが、(2)の正答率は(3)以降とあまり変わらず、(2)は解けてないが(3)以降が解けている答案が多く見られました。(3)は反復試行の確率です。計算問題として見ると複雑なのですが、問題文がヒントになったためか正答率は低くありませんでした。(4)(5)は条件付き確率の乗法定理やベイズの定理の問題です。この正答率は高く、特に(4)はかなり良くできていました。

### ◆ 経済学部 後期日程 (小論文)

#### <出題の意図・ねらい>

後期日程の小論文は、筒井淳也『仕事と家族-日本はなぜ働きづらく、産みにくいのか』からその一部を抜粋して出題した。今回は、小論文を通じて受験生の社会の諸問題に対する論理的思考能力を試したいという意図から、女性の労働環境に焦点を当てた本書を選択した。4つの設問のうち、設問1～設問3は、課題文の内容を十分に理解したうえで、制限された字数内で簡潔に文章を記述する能力をみる問題であり、設問4は、課題文の内容を踏まえたうえで、自身の考えを論理的に表現・展開する能力をみる問題である。

#### <答案の特徴と傾向>

課題文は文章量もそれほど多くはないが、全体の文脈を適切に理解する必要がある設問もある。

設問1については、本文中の文章から必要な要素を取り出し、簡潔にまとめる能力が問われるが、正答率は高かった。

設問2は、本文中から抜き出す理由は複数あるにもかかわらず1つだけ抜き出して重要な論点を見落としている答案が多かった。具体的には、女性の管理職比率に関する問題であり、管理職比率について回答するためには、本文をもとに自身で論理を展開する必要があったが、問われているのが管理職比率であることを見落とし、女性の就労一般について論じた文章を安易に抜き出して回答とする例が数多く見られた。結果、正答率は総じて低かった。

設問3も同じく論理的思考が求められる、女性の管理職比率に関する問題であったが、ここでも、問われている内容を十分に考慮しない結果、独自に論理を展開する必要性に気付かず、文脈の異なる文章を本文から抜き出して、そのまま解答とする例が多く、アメリカとノルウェーのケースを十分に比較してまとめている答案は少なかった。結果、設問2同様に正答率は低かった。

設問4は、本文を踏まえつつ、自身の考えを論理的・説得的に表現する能力を見る問題である。ほとんどの解答では独自の考えによる様々な政策案は示されていたが、その根拠や考えうる効果、および問題点にまで言及している解答は少なかった。



## ◆ 文学部比較文化学科 前期日程（総合問題）

### <出題の意図・ねらい>

#### 問題Ⅰ

英語の語彙力と基礎的な文法や構文の知識を問うとともに、推測を交えながら英文を読解する能力と、日本語の文を正確に記述する能力を問う問題を出題した。

問1 基本的な英文和訳の能力を問うた。

問2 文脈の理解と語彙力を結びつける力を問うた。

問3 文脈の理解と語彙力を結びつける力を問うた。

問4 基本的な英文和訳の能力を問うた。

問5 比較的長い英文を、文意を理解し、適切な日本語に置き換える能力を問うた。

問6 比較的長い英文を、文意を理解し、適切な日本語に置き換える能力を問うた。

問7 文脈を踏まえて英文を適切に和訳する能力を問うた。

#### 問題Ⅱ

日本文を適切に理解したうえで、正確に英訳する能力を問うた。

#### 問題Ⅲ

和歌の修辞を題材にした論説文から出題した。題材の内容に惑わされることなく、論理の流れをつかみ、抽象的な説明を具体的なレベルで理解できるかを問う問題を出題した。

問一 比喩表現を理解し、具体的に読み解くことができるかを問うた。

問二 本文全体の論旨にかかわる部分が正しく読み取れているかを問うた。

#### 問題Ⅳ

日常的によく見聞きする言葉を取り上げ、言葉に関心を持ち、それらの意味を正しく理解できているかを問う問題を出した。

問一 日常的によく用いる言葉を正確に書き取れるかを問うた。

問二 ニュースなどでよく取り上げられる語句を出題し、日常的に様々な言葉に興味関心を持って学習しているかを問うた。

問三 基本的な言葉の意味を正しく理解できているかを問うた。

### <答案の特徴と傾向>

#### 問題Ⅰ

問1 「アイヌ」を地名・地域名と勘違いしている解答がかなり多かった。また、**presence** を誤訳している解答もかなり見受けられた。

問2 “joint” とするべき答えを “few” としている解答が多かった。

問3 “rural” とするべき答えを “contrary” としている解答が多かった。

問4 activist, promoting, renewing, preservingなどを正確に訳せていない解答が多かった。下線部の最後まで訳ができていない例も少なからず見られた。

問5 oppression, discrimination, erosion, incorporationなどの単語を「反対」「描写」「発展」「非協力」などに訳し間違っている解答が非常に目立った。また文章の構造がつかめていない答案が多かった。

問6 個々の単語の意味は把握できていながらも、全体的な文構造を把握できていないために、低得点に終わった解答が多かった。

問7 “who”以下の構文の読み取りに問題がある解答が目立った。英単語をカタカナ語で解答しているケースが多く見られた。“process”“subject”を正しく理解していないものが多くあった。

## 問題II

- (1) 疑問文の構文を適切に組み立てることができていない答案が目立った。また、主語を適切に把握できていない答案も少なからず見受けられた。
- (2) 大多数の答案は、適切な英語構文を組み立てることができていたが、三単現や複数形の使用法でのミスが目立った。

## 問題III

問一 「光芒の伽藍を敷設する」という比喻表現が何を表しているのかという点については理解できていたが、本文に即して「具体的に」説明することができていない解答が目立った。150字程度の文章を書くうちに文がこんがらがっている解答も多かったので、短めの文章で端的に説明する技術を身につけてほしいところである。

問二 総じてよくできていた。ただし、一文で解答しようとした答案が多く、そのため文章が乱れ、結果的に意味が通らなくなってしまうものが多かった。160字程度の長文であるから、いくつかの文章に分けて書くのがよい。

## 問題IV

問一 総じて正解率は高かったが、以下に挙げるような誤答がしばしば見受けられた。①二文字目を衣偏にしているもの。③上下の大きさが逆になっているもの。④一文字目にも立心偏を付けているもの。或いは、二文字目に立心偏の無いもの。⑤二文字目に言偏を付けているもの。⑥二文字目を木偏にしているもの。⑩二文字目を手偏にしているもの。

問二 正解率は高かった。遠慮や損得、遜色と勘違いしている解答がいくつか見られた。

問三 正解率は高かった。気を許せない、安心できないといった意味と勘違いしている解答がいくつか見られた。また、「気の置けない」を使って単文を作成しているものもいくつかあった。

## ◆ 文学部人間関係学科 前期日程 (小論文)

### <出題の意図・ねらい>

出典は、J.カバットジンの『マインドフルネスストレス低減法』である。課題文は、対人ストレスについての記述箇所から引用した。著者は、人間は好ましくない状況に直面すると、相手に対して敵対的な反応を示したり、相手との衝突を回避しようとすることで人間関係にストレスが生じるが、その背景として、自分の考え方だけにとらわれて相手とのコミュニケーションが行われず、相手の見方を理解せずにストレスを感

じてしまうことを指摘している。そしてこうした状況に対して、著者は全体性の視点から相手の考えを理解する必要性を挙げている。

問1、2は、英語文の読解力を問うものである。問3は、全体性の視点をもつこと、すなわち状況を全体としてとらえ、お互いの考え方を理解したり、“私たち”や“私たちの考え方”といった全体的な視野から相手を見たりすることについて、自らが提示した具体例を掘り下げた的確に表現できるかを問うものである。

### <答案の特徴と傾向>

問1 “so～ that～”、“not～ but～”などの基本的な構文を押さえて訳している者は半数以下であった。また、conflict, passive, at all costなどの単語や熟語を正確に訳せていない者も多かった。受験生には基本的な英語力の修得に努めてほしい。

問2 “be absorbed in”の熟語を正確に訳している者はかなり少なかった。また、最後の文章の構文を正確に捉えて訳している者も少なかった。

問3 設問の「全体性という視点をもつ」という意味を、課題文に沿って理解できているかで答案に大きな差が出た。具体例をあげて、結論が「他者の意見を聞くべき」や、「全体性の視点で考えるべき」（個人の意見は重視しない）という論述が見られ、設問で示した課題文の下線部について説明できていないものがあった。設問の意図を正しく理解すること、それに応じた具体例を挙げることを心がけてほしい。

また、課題文を理解することはできていても、その考え方を使用して論述することが不十分で、具体例と、それへのコメントや結論で終わっている答案もあった。自分の論旨に沿って、構成・説明する準備を行ってもらいたい。

具体例については、個人の経験や家族など身近な具体例をあげたものが多く、「国家や政府、政党といった大規模な集団」をあげたものは少なかった。いずれにせよ、課題文での「全体性という視点」は、個人でも大規模な集団でも同じという視点で書かれているので、具体例が、個人においてだけ当てはまったり、大規模な集団だけに当てはまったりする説明になっていけば、理解が不十分であったことになる。

設問の「衝突を回避し、和解を見いだす可能性」のところを、背景やプロセスも含めて記述できている答案もあった。字数以内で論文を書くことを求めているので、字数制限を意識して、字数を有効に活用してもらいたい。

## ◆ 文学部比較文化学科 後期日程（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

問1

長文を読解する能力と、そこから必要な情報を選び出してまとめる力を問うている。この問に答えるためには、問題文全体を的確に把握している必要がある。著者のいう「人権（自然権）」と「市民権」の違いを正確に把握した上で、定められた字数で的確に説明できているかを問う問題である。

問2

問題文は、「人権」という概念が欧米の思想史においてどのように形成されてきたのかを論じている文章である。「人権」という言葉は社会においても学校教育の場においても盛んに用いられるが、その定義・内実についてはあまり掘り下げて考える機会は乏しいのではなかろうか。この著者の思想史に立脚した理解を受け止めた上で、これまでの自身の体験や経験、あるいは現実の社会の在り方に照らしながら、「人権」というも

のをどう捉えるのかを問うものであり、論理的かつ説得力をもって論述する能力を見るために出題した。

### <答案の特徴と傾向>

#### 問1

どの答案も概ね問題文全体を理解できていたように思われる。人権の説明の方を詳しく書きすぎたため、市民権の説明がやや不足している答案や、人権についてはそれを保障するものがない点をおさえられていないものがいくつか見られた。

#### 問2

筆者の意見に賛同する答案が多く見られた。しかしその要約に終始し、自分の考えを論理的に展開できていないケースも見られた。単なる意見表明にとどまり説得力に欠ける答案も見られた。

## ◆ 文学部人間関係学科 後期日程（集団討論）

### <集団討論の意図・ねらい>

後期日程の試験は、数人の受験生による与えられた討論テーマに基づいての集団討論である。テーマを設定した討論場面において、自分自身の見解をテーマに沿って論理的・独創的に表現できる力、情報提供や意見調整など円滑なコミュニケーションを進める力、集団の中で適切なかたちでリーダーシップを発揮していける力などを見ていきたいと考えている。なお、討論テーマはあくまでも討論のために設定されたもので、それ以上の意図を持つものではない。

### <受験生の特徴と傾向>

集団討論では、限られた時間の中で、それぞれの意見を引きだし、テーマに関する背景や論点を設定し、その解決策に向けて建設的な議論をしていくことが求められるが、集団討論の経験や準備の差が見られた。

討論については、それぞれの意見を尊重すること、テーマに沿って討論を進める点については意識されていた。

ただし、討論によってテーマを深めていくことや、とりわけ問題解決の方向を発展させていくことについては課題が見られる。意見交換や、賛否を出し合う、経験を紹介しあうということにとどまらず、テーマに沿って問題を確認し、その解決策について深めていくことを意識してもらいたい。

司会者によって、議論の方向性が定められてしまい、それを修正できないグループもあった。

## ◆ 法学部 前期日程（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

#### （１）課題文選択の背景

出典は、瀬川至朗『科学報道の真相——ジャーナリズムとマスメディア共同体』（筑摩書房、2017年）である。本書は、全国紙での記者経験のある筆者が、主に科学報道を取り上げて、マスメディア報道の構造について考察したものである。本問では、その中から、「客観報道」と「公平・中立報道」の問題点について論じた部分を取り上げた。

課題文で筆者はまず、コヴァッチらが提唱した「ジャーナリズムの10の原則」を紹介する。ジャーナリズムは、自由で自律した社会をかたちづくり、そこに生活する主権者たる市民が主体的に考え議論するのに必要な情報を提供するために、すなわち、民主主義社会を形成し維持していくために存在する。こうしたジャーナリズムの目的から、10の原則が提示されている。

それを踏まえ、筆者は次に、「客観性」についての議論に入る。リップマンが「取材における客観的な方法」を強調したのに対し、ジャーナリストたちは客観性を「客観的に伝えること」と誤解した。しかし、記者が現場で見たこと聞いたことの「検証」がなされなければ、真実性は担保できない。こうして、①真の客観性とは取材における科学的な方法のことであり、ジャーナリズムにおける客観性とは「検証の規律」を意味する、②日本においても、「事実をありのままに伝える」ことに焦点が当たっているが、むしろ、取材方法の客観性、すなわち取材調査における科学的アプローチ法が重要だということを認識すべきである、と筆者は主張する。

本問は、以上のような筆者の主張を正確に読み取った上で、課題文で議論されている「客観的な報道」の意味と問題点を説明し、その次に、民主主義社会にとっての望ましい報道についての受験生の見解を問うものである。昨今、マスメディアやソーシャルメディアにおける、いわゆるフェイクニュースと呼ばれるものが問題視されている中で、民主主義社会にとっての報道の在り方という、法学部で学ぶ上での原理的課題について受験生に考えてもらうことが、出題のねらいである。

#### （２）受験生に何を望むか

まず、上述した筆者の主張を正確に理解し、客観性の意味について適切にまとめる力が求められる。次に、筆者の主張を受け、民主主義社会にとって国民がさまざまな事実を知ることの重要性等について、自分の言葉で、論理的・説得的に論述することが求められる。

### <答案の特徴と傾向>

本問では、問題文にあるように、「客観的な報道」の意味と問題点をまとめること、そして、民主主義社会にとって望ましい報道とはどのようなものなのかについて受験生の考えを述べることの2点が要求されている。この2項目について書けているか否かが、出来・不出来に結びついたといえる。以下、答案の特徴について述べる。

(1) 課題文の意味は理解できている答案が多かったが、筆者の主張に対する賛否を論じてしまった答案が散見された。本問では、これについては問われていない。

(2) 筆者が考える真の客観性と、そうでない客観性とを区別できていない答案が散見された。

(3) 科学的アプローチ法といった語句を書くだけで、その内容を具体的に論じていない答案が散見された。

(4) 前半について、課題文の内容はおおむね理解できていたものの、そのまとめ方で得点に差がつく傾向が見られた。また、前半はよくできていても、後半で得点に差がつく傾向が見られた。

(5) 表層的なマスコミ批判に終始してしまう答案が散見された。自説がなぜ民主主義社会にとって良いのかが書かれていない等、自説の論証不足の答案が散見された。

(6) 民主主義社会の意味・理念と関連付けて報道の意義について議論するのではなく、表面的なことしか書かれていない答案が散見された。逆に、この点について深く掘り下げて論じた答案は高く評価された。

「民主主義」という言葉は、受験生は誰でも知っている言葉だと考えられる。しかし、その誰でも知っている言葉につき、掘り下げた理解をすることが望まれる。例えば、その概念を構成するものは何なのか等について、普段から考えて欲しいのである。そして、問題文(1ページ目冒頭の数行の部分)をしっかりと読み、何が求められているのか(何が問われているのか)を十分、確認してから、課題文を読み、答案構成を考えた上で、解答を始めて欲しい。問題文には、無駄な語句はないのである。

## ◆ 法学部 後期日程 (面接)

### <面接の意図・ねらい>

法学部では、一般選抜後期日程において、面接による選抜試験を実施している。面接を実施している理由は、単にセンター試験の成績のみで入学者を選抜するのではなく、対話形式により社会的問題関心等を問うことにより、勉学の意欲と幅広い素養を持った学生を選抜するためである。従って、面接にあたっては、①法学部学生として必要とされる社会に関する基礎的知識と問題関心、②社会的問題に対する論理的思考力および多角的検討能力、③プレゼンテーションおよびコミュニケーション能力、④受験生の入学意欲や将来設計を含む志望動機等を中心に評価している。

### <受験生の特徴と傾向>

第1問では、学科の志望動機と法学部入学後どのようなことを学びたいかに内容を絞り、かつ1分程度という時間の区切りを設けることで、受験生自身が志望動機等を自分の言葉で要領よく順序立てて説明できるかを評価した。目的意識がはっきりしており、それを明確に示すことができた受験生は高い評価となった。

第2問では、社会的問題として、スポーツ振興に対する行政の支援を取り上げた。東京オリンピック開催決定も相まって、近年、行政によるスポーツ事業への関心が高まっている。こうした事業は一般に、産業振興や観光誘致のみならず、健康増進、コミュニティ形成、少子化対策等の文脈で論じられ、地域社会全体に対する広い波及効果があるものとして推進されている。他方で、スポーツ活動は人によって好悪・趣向・可否が異なり、公的リソースの投下先としての適切性や優先度が問われることもある。根底に存在する主題は、公平性や、私的活動と公的支援の緊張関係である。

本問の主眼は、私的活動に対して公的支援がどのように関わるべきか、社会的な営為の面を持ちつつも万人が平等にその恩恵に浴せない領域を支える社会的コストを誰が負担するべきかといった点にあり、スポーツ行政や当該産業の知識そのものを問うているわけではない。公平性や公私の緊張関係に関わる問題について多様な立場に思いをめぐらし、自分なりの意見を立論する能力や、対話や応答の中で異なる見解を尊重しつつも自説を適切に展開する能力を受験者が有しているかを評価した。おおむね適切な解答ができていたが、複数の視点(例えば、経済、地域貢献、高齢者)から意見を展開できた受験生、複数の論拠を挙げることでできた受験生は高い評価となった。

第3問では、最近の社会的事件・出来事について問うことで、受験生が、①社会的問題に関心を有しているか、②それについてどの程度の知識を有しているか、③それを説明する能力を有しているか、④質問された内容に対して的確な解答ができるかを評価した。ここでは、自分の問題として最近のニュースを考えるこ

とができていた受験生が高い評価となった。

第2問と第3問に共通して言えることは、重要な言葉や新聞の見出しをただ単に知っているだけで実はそれらについて理解していない受験生は低い評価となり、仮に正確な用語は知らなくても、その実質的内容を自分の言葉で説明できた受験生は高い評価となったことである。普段から社会や政治経済への関心と知識を広げ、出来事そのものだけでなく、その背景にある社会的問題との関連性を捉えることができるようになることを意識してほしい。

## ◆ 地域創生学群 前期日程（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

今回の試験の出題文は、これまでの一般選抜の小論文試験の傾向を踏襲し、地域の再生と創造（地域創生）に関連すると考えられる文章の中から、次の3点を念頭に置きながら、選定しました。1点目は、地域創生やまちづくりを行う上で重要となってくるであろう地域社会の基礎的な知識について言及している文章であること、2点目は、地域創生学群において学生が活動していく中で、地域社会の現状について理解しておかなければならないことに関連した文章であること、3点目は一般選抜試験であることを考慮して、一般的かつ平易な文章であることです。以上の3点を鑑み、今年度は鳥越皓之（2012）『水と日本人』岩波書店、の該当箇所が最も適当であると判断し、出題文として選定しました。

今回の設問では本文を読み、鳥越氏が指摘している日本の地域社会の特性を理解した上で、「筆者は現代社会における地域生活の充実のために、何が重要だと考えているか」について、その理由を明らかにしながら説明してもらうことにしました。地域社会がどのような仕組みによって維持され、日々の生活が成り立っているのか、その特性を理解するとともに、そのような社会構造であることを考慮したうえで、今後「地域生活の充実のために、何が重要であるか」という課題に答えているかどうかを重要となっています。

### <答案の特徴と傾向>

地域社会において存在する「一般的互酬性」と「ローカル・ルール」について正しく理解し、その相互関係について、筆者の考え方を踏まえながら論理的に説明が出来ているかどうか重要な評価ポイントでした。

答案の傾向としては、設問文の中にある「地域生活の充実」という言葉が文章の最後に存在するため、文章の最後のあたりを単に抜き書きしている答案や、一般的互酬性やローカル・ルールに関する説明を事細かに書き、その相互関係について言及がされていない解答も見受けられました。

一方で、一般的互酬性とローカル・ルールの関係性や、なぜローカル・ルールが地域社会に必要であるのかを適切に説明できている答案もありました。また単に、専門用語の説明や事例の紹介の抜き書きに終わるのではなく、筆者の考え方について、体系的に理解し、論理的に説明が出来ている大変すばらしい答案もありました。このような答案には高い得点をつけています。

### <集団面接のポイント>

今年度の一般選抜における面接試験では、受験生により活発な議論を行ってもらうため、はじめに課題に対する自らの意見をまとめてもらい、その後、それぞれの考えを共有したうえでディスカッションを行ってもらいました。出題のねらいとしては、社会情勢に対する基礎的な知識を持っているか、また、それに対する自らの考えや見解を有しているか、そして、それらを他者との議論を通じて深めていくことができるか、ということを見定めるところにあり、入学後、「地域創生」の担い手としての使命感を保持しつつ、地域の方々と有意義な協働を進めていくことができるか、ということを経験的な評価基準としました。

## ◆ 国際環境工学部 前期日程

### 理科 (物理・化学・生物)

#### <出題の意図・ねらい>

##### 【第1問～第3問 物理】

###### 第1問

斜面上での物体の運動に関する問題である。力学的エネルギー保存の法則、運動量保存則の基本的な考え方を理解しているかを問う問題である。

###### 第2問

気体の各種状態変化における熱の出入り、それらの状態変化で構成されるサイクルの仕事率および熱効率などの基礎的な理解度を問う問題である。

###### 第3問

前半はコンデンサーを含む直流回路の基礎問題、後半は計測器に関する基礎問題。直流回路におけるコンデンサーの働きを理解しているか、分流器の役割を理解しているかを問う問題である。

##### 【第4問～第6問 化学】

###### 第4問

気体の状態方程式や、物質の飽和蒸気圧に関する問題である。特に、物質質量の変化及び温度の変化に対する物質の分圧変化の理解度を確認すると共に、基本となる計算能力を確認することを目的としている。

###### 第5問

電気分解を題材に、金属や気体の性質、極板で起こる化学反応、電子量と物質質量の関係などを問う問題である。電子が関与する化学反応について、電子と物質の質的および量的関係を正しく理解できているか確認することを目的としている。

###### 第6問

有機化学の問題である。元素分析の結果と、いくつかの化学的な性質から、有機化合物の構造を推定する論理的思考力を問うている。有機化合物に関する基礎知識を活用して論理的に構造を導き出す問題は、本学のこれまでの試験でも繰り返し出題しているし、これからも出題されるであろう。

##### 【第7問～第8問 生物】

###### 第7問

代謝に関する基本的な問題として出題した。問1～3では、エネルギーの受け渡しに関係するATPの構造と機能を中心に、問4～6では、炭水化物、脂肪、タンパク質の分解過程と反応を中心に、問4～6では、炭水化物、脂肪、タンパク質の代謝に関しては、やや発展的な内容も含まれるが、基礎的事項が正しく理解できているかどうか、また、記述問題では教科書に説明されている内容を正しく記述できるかどうかを試した。

###### 第8問

問1は細胞分裂の観察について、問2はDNAの構造について、問3・4はDNAの複製について、問5は形質発現について、いずれも基本的な内容を問う問題として出題した。教科書にある基礎的内容を題材としているが、基礎的知識を活用して、観察結果や実験結果を正しく解釈することができるかどうかを試した。



## <答案の特徴と傾向>

### 【第1問～第3問 物理】

#### 第1問

力学的エネルギー保存則に関する問題の正答率は高かったが、運動量保存則を適用できていない答案が多く見られた。

#### 第2問

複雑な計算はなく、気体の状態変化とサイクルの意味をしっかりと理解できている受験生は正答率が高かった。一方でほとんど解けていない受験生もみられた。理想気体の状態方程式やボイルやシャルルの法則の式を理解せず暗記しているだけの受験生はてこずったかもしれない。

#### 第3問

全体的に高い正答率であったが、ネ、への正答率は低かった。また、問題文を注意深く読んでいないために、解答を正確に記述できていないと思われる答案も散見された。

### 【第4問～第6問 化学】

#### 第4問

式が正しく書けていても、式を表示したままで計算を行わない、または、計算を間違える受験生が多かった。また、全体的に、物質の飽和蒸気圧曲線に対する理解不足が目立った。例えば、エタノールの分圧が飽和蒸気圧を越えているにも関わらず、全てが気体のままの状態として解答する受験生が多かった。

#### 第5問

問1では、典型的な系の電気分解をとりあげ、極板で起こる反応と電流・電気量・物質量の関係について問うた。基本的な問題であり、全体的によくできていたが、少数ながら以下のような気になる答案が見られた。

- ・(1)では2つの極板それぞれで起こる反応を問うているが、両方の極板について同じ反応を書いている答案がごく少数あった。どちらかはあたるだろうという考えは「化学を理解していない」と明言しているのと同じであり、その姿勢は評価できない。本学のアドミッション・ポリシーからも、個別学力検査は基礎学力・思考力を推し量るためのものであり、受験テクニックの巧拙を問うものではない。
- ・物理量（例えば本問では、質量や物質質量、電流、体積など）を問う問題で、単位を書いていない答案があった。物理量は値（数字）と単位の両方が揃ってはじめて意味を持つと理解することが望まれる。
- ・(4)、(5)については解答に至る過程で、計算を羅列しているだけのようない答案が見られた。なぜその値を用い、なぜその計算をするのか、得られた値はどのような意味を持つのか、などを言葉で説明し、自らの思考力をアピールすることが望まれる。
- ・化学用語・科学用語に含まれる簡単な漢字をひらがなで記している答案が見られた。化学用語・科学用語は漢字も含めた学習が望まれる。

問2では、粗銅から純銅を得る手段として知られている電解精錬を、銀に適用したときにどうなるかを問うた。粗銅の電解精錬は知っているようだが、銅と銀の違いを考えること無く粗銅の場合に起こる現象のみを記している答案が見られた。化学には記憶するべきことも多いが、なぜその反応が起こるのかを説明できるようになることが望まれる。(3)では、銀の質量は求められたものの、銅の質量を求めることができていない答案が多かった。両極で反応に関与する電子の数がバランスすることを使えば容易に解くことができるはずであり、同じことを使う問1の問題の正答率は高かった。両極板でどのような反応が起こっているか、ひとつひとつ落ち着いて考えれば正答にたどり着けたであろう。

## 第6問

「組成式」、「分子式」、「構造式」の違いを正確に認識しているかどうかと、「ヒドロキシ基」、「アルデヒド基」、「カルボキシル基」を有する化合物の特徴を把握しているかどうかで、正答率に大きな差が出た。問1においては、化合物Aの完全燃焼の化学反応式において、酸素の化学量論係数を1と決めて組成式を導いていた答案が多数見られたが、係数の根拠を示す必要がある。

## 【第7問～第8問 生物】

### 第7問

問1 正答率は高かった。

問2 正確さを欠くあいまいな解答が目立った。

問3 エネルギーの放出の過程は正しく記述できているが、逆の貯蔵に関する記述がない答案が目立った。基礎的な内容を、正しく簡潔に説明できる力をつけておきたい。

問4 脂肪の代謝に関する内容がやや発展的であったため、この部分の正答率が低かったが、他は比較的正答率が高かった。脂肪に関しては、消化の過程ではなく、分解の経路について問うている点に注意したい。

問5 基本的ではあるが、正しく記述できている答案は少なかった。基礎的な内容を自分の言葉で説明できるように練習をしておきたい。

問6 アミノ酸の分解過程の反応式はやや発展的であり、正答率が低かったが、呼吸商に関しては内容を理解していると判断できる答案が多かった。

### 第8問

問1 基本的ではあるが、正答率は低かった。特に、間期と分裂期の長さを計算する問題では、内容が理解できていないと思われる答案がたいへん多かった。

問2 正答率は高かった。

問3 出題の形式がやや特殊であったためか、基本的な内容を記述する問題であることに気づかず、的外れな記述や、無回答である答案が多かった。

問4 基本的な内容であるが、問題の意図が理解できていないと思われる答案が目立った。問題文がやや長い、文章を正しく読解する力は不可欠である。

問5 問題の意図は理解しているが、配列の一部を省略して解答するなど、問題の指示に従わない答案がたいへん多かった。せっかく正解が得られたにもかかわらず、指示に従わないために失点するようなことが無いように、慎重に問題文を読み、要求している内容を的確に解答できるよう、日ごろから訓練しておくことが重要である。

## 数学

### <出題の意図・ねらい>

#### 第1問

数学Ⅰ、数学A等に関する基礎学力を確認する。整式、反復試行の確率、グラフと方程式・不等式、三角比について出題している。

#### 第2問

数学Ⅱ、数学Bに関する基礎学力を確認する。高次方程式、円と直線、三角関数、対数関数、数列について出題している。

### 第3問

数学Ⅱ「微分・積分」における「微分法の応用」を中心とした問題。増減表の作成や曲線グラフの作図を通して、論理的に微分・積分を展開できるか基本的能力を問う問題である。

### 第4問

数学Bにおける「空間のベクトル」に関する問題。ベクトルの直交、直線の式など基本的事項を理解の上で、論理的な手順で解答できるか確認している。

## <答案の特徴と傾向>

### 第1問

基礎的問題である問1の正答率が高い傾向にあった。問2については全問正解の者が比較的少なかった。問3の正答率は確率に関する基本的な問題である。問4の正答率は、概ね高い傾向にあった。問5の正答率は第1問の中においてはやや低いものの多くの受験生が正解を導いていた。

### 第2問

基本的な学力を問う問題であったが、全問正解者は少なかった。特に、問5の正答率が低い傾向にあった。なお、問4の平方根の記述を代表として、読み取りが難解な記述であった受験生が幾ばくか見受けられた。同様に、答案清書の際の書き写しミスと推察される受験生も存在した。解答用紙への記述について一層注意されたい。

### 第3問

教科書や問題集においても多く取り上げられる曲線に関して、微分法の基礎や応用を踏まえながら、増減表の作成や曲線グラフの作図、そして与えられた範囲の面積や長さを求める問題。問1と問2については約3割の受験生が完答し、その他は不完全な解答によって減点されるケースが多くみられた。一方、2割程度の受験生は変曲点のない下に凸の形状を理解できていなかった。問3は正答率が高く、前の問いが不正解であった受験生でも正解を導いているケースもあった。問4の得点結果は比較的低い傾向にあったが、前問まで正答しているものは概ね正解であった。

### 第4問

問1 正答率は60%程度であった。ここで軽微な計算ミスをしたことによって座標を誤り、以降の問題において減点となる受験生も少なくなかった。

問2 座標を数式で示し、連立方程式を用いて解を導くものである。この問の正答率も60%程度であった。

問3 直行することを基に、連立方程式を組み立てることができれば、正解の座標を導くことができる。正答率は前問よりやや低い程度であった。

問4 先の間1と問2において正解している受験生の大半が正しく解答していた。

## ◆ 国際環境工学部 後期日程（数学）

- 機械システム工学科（第3問必修、第4問選択A、Bの中から1問選択）
- 情報メディア工学科（選択）
- 環境生命工学科（選択）

## <出題の意図・ねらい>

### 第1問（第4問 選択A）

図形と計量、確率に関する基本的な知識と計算力を問う問題である。いずれも基礎能力の確認を狙っており、限られた時間で正確に計算し、解答することを期待した。

### 第2問（第4問 選択B）

図形と方程式、ベクトルに関する問題である。高度な知識や発想を問う問題ではなく、点と直線の方程式、ベクトルに関する基本的な知識と論理的な思考力を確認する問題である。

### 第3問（第3問 必須）

ベクトルの内積、積分法、および極限に関する理解度を確認する問題である。個々の基本事項を理解し、それらを正しく組み合わせて解答する応用力を確認する問題である。

## <答案の特徴と傾向>

### 第1問（第4問 選択A）

基本的な知識と計算力を問う問題のため、いずれの問題も正答率は高く、満点も少なからずいた。

### 第2問（第4問 選択B）

図形と方程式、ベクトルに関する基本的な知識と論理的な思考力を確認する問題であり、正答率は比較的高かった。しかし、解答を導き出す過程を正確に記述できていない答案が散見された。

### 第3問（第3問 必須）

ベクトルの内積や媒介変数で表された関数の微分に関する基本的な知識や計算力の不足している答案が多く、関数を求める問1が完答できた答案は少なかった。また、積分法の応用に関する問2、問3については、曲線の長さを表す公式を記述した答案は散見されたものの、概して正答率は低かった。

## ◆ 国際環境工学部 後期日程（物理）

■機械システム工学科（第1問、第2問）

■情報メディア工学科（選択）

■環境生命工学科（選択）

## <出題の意図・ねらい>

### 第1問

エレベーター内での単振動に関する問題である。運動方程式、単振動の基本的な考え方を理解しているかを問う問題である。

### 第2問

薄膜による光の干渉と、光が異なる媒質の境界を斜めに通過する時の屈折に関する基礎的な理解度を問う問題である。

### 第3問

ホイートストンブリッジの関連問題であり、電位の高低や、キルヒホッフの法則理解を確認することが狙いの問題である。

## <答案の特徴と傾向>

### 第1問

エレベーター内での単振動について基本的な知識を問う問題であるが、全体的に正答率は低かった。

### 第2問

問1の薄膜による光の干渉の問題では、光の光路差を求めることができない受験生が意外に多く、そのためこれ以降の設問(セ)、(ソ)と(タ)の正答率が低かった。問2は光の屈折のみの簡単な設問で問1よりも正答率は高かったが、設問の文章をよく読まず、早とちりで点を落とす受験生も多かった。

### 第3問

電位の大小関係を逆に取り違えている解答などが散見された。キルヒホッフの法則の理解が正しく適応できるのか判断に窮する解答も散見された。

## ◆ 国際環境工学部 後期日程 (化学)

■ エネルギー循環化学科

■ 環境生命工学科 (選択)

## <出題の意図・ねらい>

### 第1問

問1～問3は、酸と塩基に関する基礎問題である。問4と問5は、中和滴定に関する計算問題である。問6は、塩の水溶液の性質を問う問題である。

### 第2問

無機化学および理論化学の問題である。化学工業で広く用いられている無機物質として硫酸を取り上げ、触媒を用いた硫酸の製造法や、吸湿性や酸化作用に代表される硫酸の特徴的な性質を題材とした。金属のイオン化傾向、化学反応の速さと化学平衡、溶液の濃度の換算、化学変化の量的関係についての基礎的な知識や計算能力を確認することを目的とした。

### 第3問

有機化合物の異性体の構造決定を主題とした基礎的な学力を問う問題である。官能基に特徴的な反応に関する基礎的な知識と化学量論の組み合わせから化合物の構造を論理的に導き出す思考力を問うている。

## <答案の特徴と傾向>

### 第1問

基礎問題の問1～問3の正答率は比較的に高かった。問4は、試料を10倍に希釈していることを考慮していない解答が多く、正答率は問1～問3に比べて低かった。問5に関しては、問4を受けての問題であり、計算も面倒であったため正答率は低かった。問6では、理由の正答率が特に低かった。以上から、知識の記憶は一定レベルであるが、知識の理解が不十分であるため、応用(考える力)に課題がある。また、注意力や計算力もさらに鍛える必要があると思われる。

### 第2問

単体の硫黄は、石油精製の脱硫工程で主に得られている。石油の脱硫は、酸性雨の原因となる硫黄酸化物の発生を抑制するため、大気汚染対策として重要である。

計算問題では、平衡定数の導出や、質量パーセント濃度からモル濃度への換算の正答率は高かった。一方、異なる濃度の硫酸を混合して目的濃度の硫酸を調製する問題や、ある質量の硫黄から所定濃度の硫酸

の製造量を求める問題の正答率は低かった。文章問題の量的関係を正しく把握して設定条件を立式することが苦手な受験生が多いことは残念である。

### 第3問

問1、2は官能基に特徴的な反応についての基礎知識を問う問題であり、正答率は高かった。問3は、有機化合物の燃焼反応の基礎知識と化学量論から、論理的な思考により一般式を導く問題であり、記憶力に依存する問1、2と比較して極端に低かった。解答には化学量論の間違いに加え、数学的な処理の間違いが目立った。問4、5は問1～3が分かれば容易な問題であるが、問3の正答率が低いために正答率が30%程度であった。正答率が問3よりも高くなっているのは、一般化された式の導出はできないが数値を使った算術計算はできたためである。受験生の数学力の低さを示していると思われる。

## ◆ 国際環境工学部 後期日程（生物）

### ■ 環境生命工学科（選択）

#### <出題の意図・ねらい>

##### 第1問

代謝や酵素反応に関する基本的な問題として出題した。問1では、酵素反応と呼吸に関する基礎知識を空欄補充で試した。問2・3は、酵素反応と基質濃度との関係について、問4・5は、酵素反応の阻害剤と反応速度との関係について、短文での説明を求める問題を含めて出題した。問6では、電子伝達系における酸化リン酸化の機構について説明できる力を試した。問6はやや発展的な内容であるが、他は基本的な内容であるので、問1～5は完答してほしい。

##### 第2問

植物の環境応答に関して、問1は気孔を介してのガス輸送や水分調節、および光合成曲線について、問2は植物ホルモンの種類と作用について、問3は植物の光に対する反応のうち光周性と光発芽について、いずれも短文での説明を求める問題を含めて総合的な知識と記述力を試す問題として出題した。やや発展的な内容が含まれているが、基礎的な知識が十分に身につけていれば高得点が望める。

##### 第3問

問1は生態系の中でのエネルギーの輸送と収支に関して、問2は生命の誕生、および原始地球の環境変化と生物の関係に関して、基礎的な内容を主に短文での説明する力を試す問題として出題した。特に、問2に関しては諸説あることを前提に、いずれの説に従っても正解となるように解答に幅を持たせ、知識に偏らず、論理的に思考することで正解に至る過程を評価した。

#### <答案の特徴と傾向>

##### 第1問

問1 正答率は高かった。

問2 内容は理解していると思われるが、正確に記述できていない答案が目立った。

問3・4 いずれも正答率は高かった。

問5 論理性を欠くため、正確に意図が表現できていない答案が目立った。

問6 やや発展的な内容であったが、内容をよく理解している者は正しく記述できていた一方で、無回答も目立った。

問題全体を通して、完答が何人かいた一方で、得点が伸びない者もあり、点差が開いた。基礎的な内容

が主体となった問題であるので、完答できるよう基礎的内容を繰り返し学習するよう心掛けたい。

## 第2問

問1 (1)の空欄補充は正答率が高かったが、(2)の記述問題は、基本的であるものの正しく記述できた答案は少なかった。光合成曲線に関しては、グラフの形は理解しているだけではなく、これを文章で正しく説明する力を身につけておきたい。

問2 (1)と(2)の植物ホルモンの名称に関しては比較的良くできていたが、(3)に関しては、問題の意味が良く理解できていないと思われる答案が目立った。複数の解答が考えられる問題に関しては、回答しにくい面もあるが、なるべく基礎知識だけで解答できるように作題してあるので、問題の意図をよく理解できていれば高得点を得ることも可能である。

問3 やや発展的な内容を含んでいたため、正答率は低かったが、完答も少数あった。

発展的な内容が含まれていたため、問題全体を通じての完答はなかったが、このような問題では、まずは基礎的問題を確実に正答することを目指したい。

## 第3問

問1 (1)は正答率が高かった。(2)は基本的ではあるが正答率はあまり高くなかった。個々の値が何を意味しているのかが十分理解できていないように思われる。(3)の①はほぼ正解であったが、②では、生物界の区分に関するいずれの説に従っても正解としたものの、「原核生物」と「原生生物」の区別ができていないなどの知識があいまいなことによる誤答が目立った。(4)はもっとも基本的な問題の一つであるが、意外にもあいまいな記述が多く、完答はほとんどなかった。知識だけではなく、エネルギー収支の概念をよく理解しておきたい。

問2 (1)は比較的よくできていた。(2)は様々な説があり、いずれの説に従っても正解としたが、正答率はさほど高くなかった。(3)は比較的正しく記述ができていたが、オゾン層のはたらきについての理解があいまいな答案も目立った。(4)は自由記述の問題であるが、論理的に記述できている答案は少なかった。

問題全体を通じて、基礎的知識を活用して正しく記述する力が不足していると思われる答案が多かった。文章で正しく伝える能力はどの分野でも必要であるので、日ごろから自分の言葉で正しく意図を伝える訓練をしておきたい。

## ◆ 国際環境工学部 後期日程（面接）

### ■ 建築デザイン学科

#### <面接の意図・ねらい>

グループ面接および個別面接・口頭試問を行った。

グループ面接は受験生を4～5名程度のグループに分けて行った。

- ・住みたい都市環境に関する問題
- ・他の受験生の意見について質問し、回答を求めた。

個別面接・口頭試問では、

- ・自己PRおよびその内容
- ・感動したことのある建築について
- ・建物の高層化のメリットとデメリットについて質問し、回答を求めた。

これらの質問を通じて受験生の思考力および意欲などを確認した。

## <受験生の特徴と傾向>

### グループ面接

都市部に住みたいか郊外に住みたいか問うたところ「郊外」と回答する学生が8割程度であった。ディスカッションでは、多くの受験生が積極的に意見を述べていた。また、自分の意見を踏まえながらも他の受験生の意見に寄り添う学生が多くみられた。

### 個別面接・口頭試問

質問に対して自らの考えを整理し、的確に述べている受験生が多くみられた。感動した建築に関する出題では、自身の近隣施設や住宅に関する回答が多くなされた。建築物の高層化のメリット・デメリットとしては、景観や集約効果等の利点、また耐震面や周辺建築への日照への影響等の欠点について多く挙げられた。



## 平成 30 年度入試の出題の意図、採点総評 《推薦入試》

### ◆ 外国語学部英米学科 推薦入試（全国：面接）（地域：小論文）

全国推薦（面接）

#### <面接の意図・ねらい>

英語で自分の考えや意見を深く表現することができ、スムーズなコミュニケーション能力が備わっているのかを問う。

#### <受験生の特徴と傾向>

全ての受験生が積極的にコミュニケーションを取り、難解な質問にも粘り強く答えようとする熱意を見せた。受験生全員が、期待に十分に答える結果を得ることが出来た。

地域推薦（小論文）

#### <出題の意図>

問題文は、楽器演奏上達の秘訣にまつわる文章である。

問 1 は、重要ポイントを的確に捉えて、理解した内容を簡潔にまとめる力を問う問題である。

問 2 と問 3 は、英文を読むために必要な構文と語彙の理解を問う英文和訳の問題である。

問 4 は、質問に従って自分なりの議論を論理的に構成するエッセイ問題である。

#### <答案の特徴と傾向>

問 1 問題文の大まかな内容は多くの受験生が理解できたようだが、要約する上で重要なポイントを的確に押さえているかどうかで理解度の差が見られた。

問 2 英文の構造と意図するところを理解し正しく和訳された答案も見られた一方、理解が不十分なまま直訳している答案も多数見られた。

問 3 英語表現の意味を理解したうえで自然な日本語に訳している答案も少数見られたが、不自然な和訳の答案も目立った。

問 4 何かを学ぶことに対する意欲や熱意を持ち続けるためにどのような工夫をしているか、受験生が日頃の経験に基づいて論じる問題である。自分の考えや意見を、筋道を立てながら正しい英語でいかに表現出来るかで実力に差が生じた。

### ◆ 外国語学部国際関係学科 推薦入試（小論文）

#### <出題の意図・ねらい>

資料 1 は、先進国と発展途上国の経済格差の拡大を伝えた英国『ガーディアン』紙の英文記事であった。

資料 2 は『朝日新聞』に掲載されたもので、先進国で成功の機会を求める途上国の専門技能を身につけた労働者に関する記事である。二つの記事は、グローバル化した世界の経済の現実を伝えている点では同一であ

るが、紹介する現実への対処法が正反対である。二つの違いは、世界経済の構造を変革する政治の動きに期待するのか、それともグローバル経済を機会と捉えて人々の教育に期待するのかである。問1では、資料1の英文記事で示された筆者の主張を正確に読み取れているかどうかを確認した。問2は、二つの資料で述べられた内容を性格に読みとって、グローバル経済への考察を求める問題とした。

### <答案の特徴と傾向>

問1 資料1は平易な英文であったものの、南北問題や経済の知識が要求されたため、文脈を誤って理解し、内容を正確に読み取れていないものがあつた。評価の高かつた答案は、趣旨をおおよそつかんだうえで、日本語として一貫した文章を作成したものである。英語の力は一定水準にあるものの、南北問題を理解していないため、誤訳したものが散見された。また、読み慣れていない内容のためか、一部の答案には「ドル」とすべきところを「円」と誤ったり、日本語の誤字をしたりするものもあつた。

問2 ①英文の資料1と設問がきちんと読めておらず、何が問われているのかを把握しないまま解答したものが多かつた。この英文では賃金格差が権力の産物であるという点を強調しているとわかれば、問2の回答作成は大きく楽になつたはずである。

②資料1と資料2(和文)の双方に書かれている内容に触れることが必要なのに、触れていないものが散見された。触れていると書きながら実際には書いていなかったりしたものもあつた。

③解答の中で、どこが資料1で、どこが資料2なのか明示されていないものがあつた。この点を明示することが、この問題の要であつたが、それを書かずに、自分の意見を書いてしまったものは評価が低くなつた。

## ◆ 経済学部 推薦入試(小論文)

### <出題の意図・ねらい>

出題文は、公共交通の衰退と中心市街地の空洞化・スプロール化を論じた書物からの引用である。設問1と設問2は、出題文の著者の見解を正しく読み取り、その内容を字数以内にまとめて説明することを求めたものである。

出題文の1頁には、当該鉄道バス会社の経営破たんが、通常バス・鉄道の廃止のケースとどのように違っていたかが、説明されている。設問1は、その要点をまとめて説明できることを問う出題であつた。

設問2は、出題文の2頁の15行目から3頁の下から5行目までに説明されている内容のうち、交通事業者そのものに関する問題として説明されているのは、主に第五と第六の背景であることを読み取り、それらの内容を字数以内で説明できるかどうかを問うものであつた。

設問1と2では、読解力と論理的に文章力が、ポイントである。

設問3は、著者の主張を正しく理解して、その内容を簡潔にまとめ、次に、それに対して批判することを求めた出題である。この場合の「批判」とは、著者の提案について、実現可能性への疑問の提起、目指す方向の妥当性への反対表明、などいくつかの解答パターンがありうる。そのいずれの解答法を取るかは自由であるが、著者の提案を正しく理解できていること、それに対する自分なりの批判が論理的に展開できているかが、ポイントである。

## < 答案の特徴と傾向 >

設問 1 :

通常の経営破たんとは当該鉄道バス会社の経営破たんが、どのように異なっていたのか、明確に対比されていない記述が散見された。

設問 2 :

交通事業者に関わるものは第五と第六の内容であるが、それら 2 つを要約せず、1 つのみ要約した解答がいくつかあった。

設問 3 :

以下の答案は、概ね大幅な減点の対象となった。①出題文 4 頁の 13~14 行目の「筆者は、……自家用車の利用を規制することには賛成しかねる」は、「賛成できない」の意味であるが、まったく逆に「賛成できる」の意味に理解している答案。そして、その誤解に基づいて批判を展開し、「自家用車の利用を規制すべきではない」との自説を述べていた。②「批判しなさい」との設問であるにもかかわらず、「自由に意見を述べなさい」との設問であると勘違いして、筆者の意見に賛成である旨を展開している答案もあった。また、批判をせずに自説を述べているだけの答案も散見された。たとえば、排気ガスを抑制して地球温暖化を防止することが大切であることを論じている解答である。著者は、都市のスプロール化、過度な自家用車依存、公共交通の衰退の三位一体の悪循環を断つために、「交通まちづくり」を提案しているのであり、地球温暖化は一義的な対象ではない。

堅実な解答としては、著者の「交通まちづくり」の実現可能性について、財源に触れられていないことを批判した解答が多かった。著者の提案では効果が出るまでに長い年月がかかることを述べて、批判を強めた答案もあった。また、公共交通の衰退と市街地のスプロール化の原因には、IT 化や宅配や中食の進展によって外出しないライフスタイルが普及していることをもって、著者の見方は一面的であると批判して、提案の効果に疑問を呈している解答もあった。その他、モータリゼーションの流れは不動のものであり、自動車を持っている人々が、公共交通の利用を増やすことは、コスト的に難しいとの疑問、魅力ある街づくりも同時に行わないと効果がないとの批判、人口減少の傾向の中で市街地を活性化させても、今度は逆に郊外が衰退する、と著者の提案の意義そのものへの反対など、様々な解答のバリエーションが見うけられた。

## ◆ 文学部比較文化学科 推薦入試 (小論文)

### < 出題の意図・ねらい >

諸国の 10 代の若者が抱く「幸福感」を、経済・教育・家庭・価値観などから多面的に論じるエッセイを英文で読み、筆者の主張を正確に読み取り、問いに的確に答えられるかを問うた。

問題 I

問 1 上の段落であげられている具体例が示すことを、文脈に沿って的確に読み取れているかを問うた。【読解力】

問 2 強調構文であることに気づいたうえで、10 代の若者の教育と幸福の関係についての筆者の意見を的確に理解しているかを問うた。【読解力】

問 3 上の段落で述べられていることを正確に把握したうえで、何を問われているかを的確に理解し、かつ簡潔にそれを表現する力を問うた。【読解力・分析力・表現力】

問 4 問いに対する自分の意見を、簡潔かつ正確に英語で表現できているかを問うた。【表現力】

## 問題 II (小論文)

渡辺裕『考える耳』（春秋社）より出題した。日本の近代化の過程で生まれた鼓笛隊を具体例としながら、「純粋な日本文化」という考え方について問題提起する問題文である。

問 1 は、問題文を読んで筆者の考えを正確に読み取り、過不足ない適切な言葉でまとめる力があるかどうかを見る問題である。

問 2 は、「純粋な日本文化」という考え方について、みずからの体験や知識を踏まえて論述してもらう問題である。文化に対する関心の高さと、自らの意見を論理的に相手に伝える文章能力を見る問題である。

### <答案の特徴と傾向>

#### 問題 I

問 1 内容を理解せず英語を無理に日本語に訳したような解答が多かった。また、「韓国」を「北朝鮮」と訳するような初歩的ミスも多く見受けられた。

問 2 質問の意図を理解していない答案が非常に多かった。英語の単語や文節の日本語訳を羅列しただけで、日本語として成立していない解答も多く見受けられた。

#### 問 3

- ① **these beliefs** が指し示す内容を答える問題であったが、**beliefs** の意味がわかっていない答案、**these** とあるのに 1 つの信念しか書かれていない答案が多かった。
- ② 全体的に、日本の若者の間に多く見られる将来に対する悲観的な見方の理由を問うた質問の意図を、的確に読み取れていない答案が多かった。また **South Korea** のような簡単な英単語の誤答も目立った。

問 4 問題文全体の要旨が理解されていないため、要求されている答えを正確に把握している答案が極めて少なかった。また、助詞や動詞の使用法といった基本的なレベルでの文法的間違いが目立った。

#### 問題 II

##### 問 1

鼓笛隊の「文化的・歴史的価値」の変化を問う問題であったが、鼓笛隊そのものの説明に終始している答案が散見された。また、「保存する価値がないとされるように」変化したとする誤答も少なくなかった。

##### 問 2

「『純粋な日本文化』という一面的で貧困な固定観念を脱して、そのあり方の多面的な広がりであらためて見直す」という文の意味は「伝統的な日本文化を純粋なものとする見方」の再検証を主張しているのであるが、そのことを読み取ることができない答案や「日本文化以外の文化の価値を見直す」、「外国人に受け入れられるような文化に変えていこう」と誤解した答案が多かった。

## ◆ 文学部人間関係学科 推薦入試（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

出典は、イスラエル人の歴史学者であるユヴァル・ノア・ハラリ（Yuval Noah Harari）による、”Homo Deus - A Brief History of Tomorrow” および『サピエンス全史（下）－文明の構造と人類の幸福』である。それぞれの本では歴史を多角的な視点からとらえ直すことにより、人類の文明史を再検討し未来の社会のあり方を提案している。受験生には、新聞などを通して培った社会への関心や、高校などで学んだ知識を生かし、より広い視野から人間の関係性や社会との関わりを考察してほしいという考えから、本学科の小論文のテキストとしてこの二冊を採用した。

問1 解答に関連する内容は、設問下線部の前段にさまざまな例をもとに繰り返し述べられているものであり、英語力がなくてもそのうちのどれかを読み取ることができれば解けるだろう。また問1と問2は、問3を解答するにあたっての手がかりになるように設定されている。

問2 下線部の英文の構文を正確に理解し、意味が通る日本語に翻訳できるかどうかを問うている。構文はやや難しいが、論の文脈をしっかりと読み取れていれば解答できるだろう。

問3 小論文では設問にそった論理的な解答が求められている。今年の問題に関しては、とくに以下の3点について適切に論じられていることが必要となる。課題文の内容をもとに、別の視点からとらえ直す「相対主義的な思考法」の意味を理解できているかどうか。社会的・歴史的な事例をひとつとりあげ、それが検討されているかどうか。検討された事例に基づき、人類の未来や幸福のあり方について、従来の見方と違った視点などから、筋道だつて論じられているかどうか。

### <答案の特徴と傾向>

#### 問1

問いに関連する記述をほとんど参照していない解答や、基本的な単語の誤訳が目だった。一方できちんと内容を読み取れている者は過不足のない正解が書けていた。

#### 問2

問1と問2の解答について、そもそも日本語として整合性がなく意味をなさないものがあった。訳が不自然な場合は誤訳の可能性が高いので、試験中にしっかりと再検討すべきである。すべてを正確に訳せていない場合も意味が読み取れていれば部分点をあたえている。

#### 問3

おおむね設問にそった解答が書けていれば一定の評価の対象とした。逆に設問との関連性うすく、あらかじめ準備してきたかのような内容の文章は望ましくない。今年問いについては、歴史や社会に対する広い視野をもとに論を立てることが期待されていたが、身近な問題に終始する傾向がみられた。

また「相対的に考える」という課題についても、提示された文章の中でそうした視点が示されていたにもかかわらず、理解できていない解答があった。たとえ自分が知らないことや新しい知見があっても、その場で理解しながら考察を組み立てられる能力の差が、最終的な評価に大きく反映されている。

## ◆ 法学部 推薦入試（小論文）

### <出題の意図・ねらい>

#### （１）出題文選択の背景

出典は、森村進『自由はどこまで可能か＝リバタリアニズム入門』（講談社、2001年）である。本書は、リバタリアニズム思想に共感する法哲学者である筆者が、さまざまな具体例も挙げながら、その思想の内容や意義を説明するものである。本問では、その中から、自己奴隷化や臓器売買を例として、自己所有について論じる部分を取り上げた。

課題文で筆者はまず、「各人は自分自身の人身と能力の道徳的に正当な所有者である。それゆえ、各人は他の人々を侵害しない限りで、その能力を自分の好きなように用いる（道徳的な）自由がある」（G・A・コーエン）と定義される自己所有権テーゼを紹介した上で、同テーゼの帰結として自己奴隷化や臓器売買は認められるのか、言い換えれば自己奴隷化や臓器売買を禁止すべき十分な理由が本当にあるのかを検討する。そして、無償の譲渡を許す場合に有償の売買を禁止すべき根拠は見出せないこと、本人が自分の生命や身体へのかなりの制約や危害を引き受けることは認められていることを指摘して、「生命や身体への権利は財産権と違って譲渡できない権利だ」という理由で自己奴隷化や臓器売買を禁止すべきとする主張に対して、限定が必要だと説く。他方、自己奴隷化を正当化する一部のリバタリアンの主張に対しては、現在の契約者とは別人になってしまう将来の当人の基本的な自由を侵害するという理由で、それを禁止できるとする。それに対して、臓器を売った人はある程度の苦痛や不都合を蒙るとしても依然として自己所有者であり、また、臓器売買を嫌悪する人の幸福観や人生観を押しつけるべきではないため、臓器売買を禁止することはできないと述べる。こうして筆者は、長期にわたる自己奴隷化や生命を奪うような臓器売買は禁止できるが、年季契約奉公や生命を奪わない程度の臓器売買は禁止してはならないと結論づけるのである。

以上のような筆者の主張を正確に読み取った上で、個人の自由（ないし自己決定）を社会（ないし国家）はどこまで制約できるのかという、法学部で学ぶ上での原理的課題について受験生に考えてもらうことが、出題のねらいである。

#### （２）受験生に何を望むか

まず、上述した筆者の主張を正確に理解し、臓器売買に関する部分を適切にまとめる力が求められる。次に、筆者の主張を受け、臓器売買という具体例に則して、社会はどのような理由で・どこまで個人の自由を制約できるかについて、自分の言葉で、論理的・説得的に論述することが求められる。

### <答案の特徴と傾向>

本問では、問題文にあるように、「臓器売買に関する筆者の意見をまとめ」ること、そして「その主張に対する」受験生の考えを述べることの2点が要求されている。この2項目について書けているか否かが、出来・不出来に結びついたといえる。以下、答案の特徴について述べる。

(1) 筆者の結論は課題文中に明示されているにもかかわらず、読み取れていない答案が散見された。とりわけ、生命を奪うような臓器売買と、そうでない臓器売買を分けていない答案が多かった。

(2) 筆者の（個人的な）直感と論理的な主張の区別ができていない答案が散見された。

(3) 筆者の仮定の議論と筆者の見解を混同してしまった答案が散見された。

(4) 筆者の主張を正確に読み取れず、自分の見解を展開しているにすぎない答案が散見された。

(5) 臓器売買問題を解決するための手法を論じている答案、さらには政策提言をしている答案が散見された。本問では、これらのことは問われていない。

(6)文章表現の稚拙さ（例えば、主語と述語が対応していないなど）により、論旨不明確となっている答案が散見された。

以上のような答案が散見されたものの、筆者の主張とそれに対する意見（賛成あるいは反対など）を明確に論じた答案もあり、それらは高く評価された。

受験生は、問題文（1ページ目冒頭の数行の部分）をしっかりと読み、何が求められているのか（何が問われているのか）を十分、確認してから、課題文を読み、解答を始めて欲しい。

## ◆ 地域創生学群 推薦入試（面接）

### I 全国推薦（地方創生推薦）

#### <面接の意図・ねらい>

以下に示すような、地域創生学群で学ぶうえで必要となる力やアイデアを有しているかを判断するため面接試験を実施しました。

- 地域創生学群の教育ポリシーを理解しており、本学群で学ぶことを強く望んでいる。
- 多様な人々と共に学ぶうえで必要となるコミュニケーション能力を有している。
- 地域活動を行う際に必要となる情報収集・分析力、計画策定力、実行力を有している。
- 自らの将来プランを持ち、それに対してどのように取り組むべきか、具体的な構想を有している。

#### <答案の特徴>

事前課題に対するレポートでは、その内容やアイデアにおいて、独創性や実現可能性に問題のあるものが散見されました。また、作成されたレポートをもとにした面接官との質疑応答でも、明確な返答が得られないケースや自らの考えを論理的に説明できない受験生が目立ちました。地域創生学群に対する志望動機と整合しないケースも見られ、そのような場合は低い評価となりました。

### II 特別推薦（活動実績推薦）

#### <出題の意図・ねらい>

特別推薦では、受験生のコミュニケーション能力、態度、活動の継続性と今後のビジョン、自らの卓越した能力を地域活動においてどのように発揮・貢献しようと考えているのかということについて、わかるような面接試験を実施しました。

#### <答案の特徴>

事前に提出された活動実績では、顕著な実績を有する受験生がみられました。単に「卓越した能力」を有しているというだけでは無く、その能力を持って地域創生にどのようにして発揮・貢献しようと考えているのかが明確に持つことができた受験生については、高い評価としました。

## ◆ 国際環境工学部エネルギー循環化学科 推薦入試（総合問題・面接）

### 【総合問題】

#### <出題の意図・ねらい>

##### 第1問

地球環境問題の一つである地球温暖化に関する基礎的な知識や簡単な計算能力を問う内容である。

問1 地球温暖化について述べた文章の空欄にあてはまる用語を選択する問題。光や熱、温室効果が理解できているかを問うた。

問2 温室効果ガスを具体的に解答する問題である。

問3 与えられた二酸化炭素排出量について、地球の表面積や大気の質量を求め、大気中の濃度がいくら上昇するかを計算する問題である。

問4 地球温暖化防止のための方策を述べる問題。文章表現力を問うた問題である。

##### 第2問

炭酸ナトリウムと塩化カルシウムを製造するためのアンモニアソーダ法と酸化物の水中での化学反応に関する基礎的な知識を問う内容である。

問1 アンモニアソーダ法は、ガラスの原料である炭酸ナトリウムの工業的製造に使われる低コストの生産方法である。アンモニアと二酸化炭素を回収し再利用することを特徴とする全体の反応サイクルの理解を含め、原料となる塩化ナトリウムから炭酸ナトリウムの生成量を計算する組み合わせの問題である。

問2 工業分野に多く使われる三つの代表的な酸化物を一定の条件下で水と反応させたときの化学反応式を誘導する問題である。

#### <答案の特徴と傾向>

##### 第1問

問1 正解が多かった。

問2 正解が多かった。

問3 球の表面積の公式（中学数学の範囲）を間違っている解答が多かった。その後の計算では、単位や累乗数を適切に扱うことができれば正解に到達していた。

問4 エネルギーの種類（再生可能エネルギー）やエネルギー使用の効率性について説明できている解答が多かった。

##### 第2問

アンモニアソーダ法におけるアンモニアと二酸化炭素の生成反応に関する理解度は全般的に高く、それぞれを反応式で表す正答率も高かった。一方、アンモニアソーダ法全体の化学反応式を誘導する部分においてはアンモニアと二酸化炭素の再利用に関連した反応の総合的な理解に大きな差が見られた。また、酸化物の例において化学反応を量論的に表現する力が不十分であることが見受けられた。

### 【面接】

#### <面接内容>

本学への志望動機、就学意欲、将来の進路などを最初に説明してもらった。その後、基礎的な化学の知識、環境用語に関する質問などに関する質疑を行い、基礎学力、意欲、コミュニケーション能力等の項目について評価した。



## <受験生の特徴と傾向>

環境への意識や就学意識は総じて高かったが、基礎的な化学の知識については十分な回答を得られることが少なかった。

また、興味ある分野に関しての簡単な環境用語や時事問題などを知らない受験生もおり、プレゼンテーションが表層的な知識で行われているような場合も見受けられた。コミュニケーション能力に問題がある受験生もおり、面接官の質問をよく聞き、正確な回答ができるように心がけてほしい。

## ◆ 国際環境工学部機械システム工学科 推薦入試（総合問題・面接）

### 【総合問題】

#### <出題の意図・ねらい>

##### 第1問（数学）

問1 三角関数と方程式の基礎的な知識を問う設問である。

問2 方程式を満たす整数解の基礎知識を問う設問である。

問3 確率に関する基本的な演算能力を問う設問である。

問4 二次方程式に関する基本的な演算能力を問う設問である。

問5 二つの曲線と一つの直線の位置関係を正確に把握し、囲まれた図形の面積を求める問題である。

いずれも基礎能力の確認を狙っており、正確かつ迅速に解答することを期待する。

##### 第2問（数学）

ベクトルと平面図形に関する設問である。高度な知識や発想を問う問題ではなく、ベクトルに関する基本的な知識と論理的な思考力を確認する問題である。

##### 第3問（物理）

問1 力、運動、力学的エネルギーの基礎を確認する問題とした。

問2 音および単振動の基礎を確認する問題とした。

問3 静磁場の基礎を確認する問題とした。

## <答案の特徴と傾向>

##### 第1問（数学）

基本的な問題で問3の正答率は高かったが、その他はばらつきが見られた。問5の正答率が低かった。

##### 第2問（数学）

基本的な計算問1の正答率は高かった。問2は点Pの軌跡が円になると気づいた人はかなりいたが、正解までたどり着く答えは少数であった。

##### 第3問（物理）

問1 力、運動、力学的エネルギーに関する最も基礎的な知識を確認する問題であり、全体的に正答率は高かった。運動量保存則に関する問いの正答率が、その他の問いに比べて相対的に低かった。

問2 ドップラー効果を含む基本的な音の性質とばね振り子に関する問題であり、正答率は比較的高かった。ただし基本的な知識を正確に理解できていないと考えられる答案がかなりあった。

問3 静磁場中の荷電粒子の動きに関する基礎的な知識を確認する問題であり、正答率は比較的高かった。ただし基本的な知識を正確に理解できていないと考えられる答案がかなりあった。

## 【面接】

### <面接内容>

受験生 18 名に対し、1 人 10 分程度の個人面接を実施した。推薦入試では、「総合的な学力が問われるセンター試験と一般選抜での合格は難しいかも知れないが、数学と物理は得意で、本学科で機械工学を学びたいという意欲が高い」学生を求めている。これに基づき、本学科を志望する動機、勉学以外で取り組んだこと、将来の進路などについて質問し、機械工学の学習意欲、学科についての理解度、学科への適合性などを確認した。さらに、コミュニケーション能力を評価した。

### <受験生の特徴と傾向>

志望理由など、事前に準備や練習ができる質問に対しては、しっかり答えていた。将来の進路に関しては、はっきりしない受験生が数名いた。想定していなかったであろう質問への対応で、評価に大きな差が付いた。スムーズに回答できた高評価の受験生が、これまでより多かった。

## ◆ 国際環境工学部情報メディア工学科 推薦入試（総合問題・面接）

### 【総合問題】

#### <出題の意図・ねらい>

##### 第 1 問（数学）

問 1 三角関数と方程式の基礎的な知識を問う設問である。

問 2 方程式を満たす整数解の基礎知識を問う設問である。

問 3 確率に関する基本的な演算能力を問う設問である。

問 4 二次方程式に関する基本的な演算能力を問う設問である。

問 5 二つの曲線と一つの直線の位置関係を正確に把握し、囲まれた図形の面積を求める問題である。

いずれも基礎能力の確認を狙っており、正確かつ迅速に解答することを期待する。

##### 第 2 問（数学）

ベクトルと平面図形に関する設問である。高度な知識や発想を問う問題ではなく、ベクトルに関する基本的な知識と論理的な思考力を確認する問題である。

##### 第 3 問（物理）

問 1 力、運動、力学的エネルギーの基礎を確認する問題とした。

問 2 音および単振動の基礎を確認する問題とした。

問 3 静磁場の基礎を確認する問題とした。

#### <答案の特徴と傾向>

##### 第 1 問（数学）

基本的な問題で問 3 の正答率は高かったが、その他はばらつきが見られた。問 5 の正答率が低かった。

##### 第 2 問（数学）

基本的な計算問 1 の正答率は高かった。問 2 は点 P の軌跡が円になると気づいた人はかなりいたが、正解までたどり着く答えは少数であった。

##### 第 3 問（物理）

問 1 力、運動、力学的エネルギーに関する最も基礎的な知識を確認する問題であり、全体的に正答率は高かった。運動量保存則に関する問いの正答率が、その他の問いに比べて相対的に低かった。

問2 ドップラー効果を含む基本的な音の性質とばね振り子に関する問題であり、正答率は比較的高かった。ただし基本的な知識を正確に理解できていないと考えられる答案がかなりあった。

問3 静磁場中の荷電粒子の動きに関する基礎的な知識を確認する問題であり、正答率は比較的高かった。ただし基本的な知識を正確に理解できていないと考えられる答案がかなりあった。

## 【面接】

### <受験生の特徴と傾向>

面接では、本学を志望する理由、就学意欲、入学後の学業と卒業後の進路について質問を行い、受験生の就学意欲の高さ、本学科の教育内容に対する理解度と将来の進路に対するビジョンの明確さに関して評価した。また、口頭試問では、数学に関する基本的な知識の理解度と思考力を確認する質問を行った。

志望動機、就学意欲と将来の進路については、明確に答えた受験生が多かった。口頭試問に対しては、迅速に回答できた受験生と基本知識の理解があいまいな受験生のばらつきがあった。微積分、関数曲線のグラフ、場合分けが弱い受験生もいた。

## ◆ 国際環境工学部建築デザイン学科 推薦入試（総合問題・面接）

### 【総合問題】

#### <出題の意図・ねらい>

##### 第1問（数学）

問1 三角関数と方程式の基礎的な知識を問う設問である。

問2 方程式を満たす整数解の基礎知識を問う設問である。

問3 確率に関する基本的な演算能力を問う設問である。

問4 二次方程式に関する基本的な演算能力を問う設問である。

問5 二つの曲線と一つの直線の位置関係を正確に把握し、囲まれた図形の面積を求める問題である。

いずれも基礎能力の確認を狙っており、正確かつ迅速に解答することを期待する。

##### 第2問（物理）

問1 力、運動、力学的エネルギーの基礎を確認する問題とした。

問2 音および単振動の基礎を確認する問題とした。

##### 第3問（造形）

問1 建築のデザインを行う上で基礎的な素養として必要な立体的な空間の認識力・想像力、三次元的な表現力、スケッチによる描写力等の総合的な造形力を見る。

問2 与えられた質問に対して的確に題意を捉え、自らの見解を述べているかを問う問題である。特に、想像力、発想力、論理的思考力、文章表現力を見る。

#### <答案の特徴と傾向>

##### 第1問（数学）

基本的な問題で問3の正答率は高かったが、その他はばらつきが見られた。問5の正答率が低かった。

##### 第2問（物理）

問1 力、運動、力学的エネルギーに関する最も基礎的な知識を確認する問題であり、全体的に正答率は高かった。運動量保存則に関する問いの正答率が、その他の問いに比べて相対的に低かった。

問2 ドップラー効果を含む基本的な音の性質とばね振り子に関する問題であり、正答率は比較的高か

った。ただし基本的な知識を正確に理解できていないと考えられる答案がかなりあった。

### 第3問（造形）

問1 商業施設であるという条件下において、写真の大きな窓のついた建物がどのような全体像であるかを想像させ、立体的な描写を課すことによって、立体的な空間の認識力、想像力、スケッチ力等の能力を見た。全体像の描写に期待したが、写真の壁面の描写に終始し、単なる直方体となっていた受験生が多く、写真からだけでは伺い知ることのできない、自由で独創的なアイデアを有する提案は少なかった。

問2 この窓が設けられた理由について想像し、短文で論理的な説明ができるかを見た。大きな窓があることの利点については多く触れられていたが、この写真の施設が商業施設であることを念頭とした回答は多くなかった。尚、順番は前後するが、ここで触れた理由が問1での提案にも活かされていれば、双方の回答に説得力がより増したであろう。

## 【面接】

### <面接内容>

10分程度の個別面接・口頭試問を行った。

- ・志望動機、高校生活の充実度や実績
- ・本学科の教育目的・内容・特色の理解度
- ・環境問題に対する興味や意識の高さを確認
- ・住宅分野における社会問題の認識とそれに対する対策案
- ・将来の夢や目標、それを実現させるための方法
- ・本人の長所を確認

に関する質問をし、回答を求めた。

### <受験生の特徴と傾向>

- ・事前に用意していたと推察される、志望動機や本学科の教育目的など質問に対しては、多くの受験生が自身の言葉で回答していた。面接官も想定していなかった視点から環境問題を捉えていた受験生も目を引いた。一方で、丸暗記した内容を必死で言葉にしようとする受験生もおり、習熟度の差異が見受けられた。
- ・想定外であったと推察される質問に対しては、一息つきながらも自分の考えを落ち着いてきちんと述べることができる受験生がいた。しかしながら、無回答であったり、無言であったり、論理的に回答することができなかった受験生もおり、ここでも差異が見受けられた。

## ◆ 国際環境工学部環境生命工学科 推薦入試（総合問題・面接）

### 【総合問題】

（第1問 必須）

（第2問 A, B, Cから1題選択）

### <出題の意図・ねらい>

#### 第1問

地球環境問題の一つである地球温暖化に関する基礎的な知識や簡単な計算能力を問う内容である。

問1 地球温暖化について述べた文章の空欄にあてはまる用語を選択する問題。光や熱、温室効果が理解できているかを問うた。

問2 温室効果ガスを具体的に解答する問題である。

問3 与えられた二酸化炭素排出量について、地球の表面積や大気の質量を求め、大気中の濃度がいくらか上昇するかを計算する問題である。

問4 地球温暖化防止のための方策を述べる問題。文章表現力を問うた問題である。

#### 第2A問（物理）

問1 力、運動、力学的エネルギーの基礎を確認する問題とした。

問2 音および単振動の基礎を確認する問題とした。

#### 第2B問（生物）

問1 分子進化（遺伝情報を担うDNAの塩基配列やいろいろなタンパク質のアミノ酸配列に関する進化）について正しく理解しているか問う問題である。

問2 網膜と視細胞・暗順応の理解を確認する問題である。

#### 第2C問（化学）

炭酸ナトリウムと塩化カルシウムを製造するためのアンモニアソーダ法と酸化物の水中での化学反応に関する基礎的な知識を問う内容である。

問1 アンモニアソーダ法は、ガラスの原料である炭酸ナトリウムの工業的製造に使われる低コストの生産方法である。アンモニアと二酸化炭素を回収し再利用することを特徴とする全体の反応サイクルの理解を含め、原料となる塩化ナトリウムから炭酸ナトリウムの生成量を計算する組み合わせの問題である。

問2 工業分野に多く使われる三つの代表的な酸化物を一定の条件下で水と反応させたときの化学反応式を誘導する問題である。

### <答案の特徴と傾向>

#### 第1問

問1 正解が多かった。

問2 正解が多かった。

問3 球の表面積の公式（中学数学の範囲）を間違っている解答が多かった。その後の計算では、単位や累乗数を適切に扱うことができれば正解に到達していた。

問4 エネルギーの種類（再生可能エネルギー）やエネルギー使用の効率性について説明できている解答が多かった。

## 第2A問（物理）

問1 力、運動、力学的エネルギーに関する最も基礎的な知識を確認する問題であり、全体的に正答率は高かった。運動量保存則に関する問いの正答率が、その他の問いに比べて相対的に低かった。

問2 ドップラー効果を含む基本的な音の性質とばね振り子に関する問題であり、正答率は比較的高かった。ただし基本的な知識を正確に理解できていないと考えられる答案がかなりあった。

## 第2B問（生物）

問1 概ね理解していたが、最後の「遺伝の法則」を問う問題では正確に説明できた解答は少なかった。

問2 視細胞に関しての理解度は高く、最後の暗順応の説明を問う問題でも概ねポイントを押さえた解答が多かった。

## 第2C問（化学）

アンモニアソーダ法におけるアンモニアと二酸化炭素の生成反応に関する理解度は全般的に高く、それぞれを反応式で表す正答率も高かった。一方、アンモニアソーダ法全体の化学反応式を誘導する部分においてはアンモニアと二酸化炭素の再利用に関連した反応の総合的な理解に大きな差が見られた。また、酸化物の例において化学反応を量論的に表現する力が不十分であることが見受けられた。

## 【面接】

### <面接内容>

本学を志望した動機、高校で理科を履修して一番印象に残った学習項目に関する説明、本学入学後のキャリアプランなどについての質問を行い、それぞれに対する受け答えから、意欲、コミュニケーション能力、学力、理解力について評価を行った。

### <受験生の特徴と傾向>

質問されたことに対して、全体的には丁寧な受け答えがなされていた。志望動機の質問では、本学の教育研究分野について十分に調べた上で説明をしていた受験生が多かったが、なかには説明している内容が本学の教育研究分野に合致せず、入学したい動機が不明確な受験生もいた。また、説明内容から一步踏み込んでさらに質問をすると、答えることのできない受験生も目立った。

# 平成30年度入試の出題の意図、採点総評 《AO入試》

## ◆ 外国語学部英米学科 AO入試

### <出題の意図・ねらい>

1. 英文読解力と講義の聴解力を見る問題。英文はやや難易度が高い部分もあったが、論理的に記されていた。講義を良く聴いていれば正しい内容理解ができたはずである。それができているかどうかの評価のポイントである。
2. 模擬授業担当教員の説明を頭に置きながら英文を読み、その上で自分の考えを論理的に述べることが出来るかどうかを見る問題。語学力を超えた総合力を判断する問題である。前年度はこの問の前に小設問が用意されていたが、本年度はこの問題に集中して解答してもらうよう変更した。

### <答案の特徴>

1. 課題文は論旨が明確であったが、あえて難易度の高い語句も残したため、講義の中で説明はなされていたが十分に消化されていない答案も散見された。講義はよく整えられたわかりやすい展開で、段落ごとに進行する形式だったため、フォローはしやすかったはずである。だが逆にそのために講義の説明を重視し課題文を十分に分析していない答案も見られた。このあたりが合否の分岐点であったと思われる。
2. 本試験で最も重要な設問である。模擬授業担当教員の説明を正しく理解して英文を読み、自分の考えを論理的に論述できた答案は評価が高くなっている。必ずしも答案文章の長さには比例していない。表現力はあっても課題文の読み取りおよび講義の聞き取りが不十分な人の場合、評価は低くなっている。

### <二次試験面接のポイント>

一次試験において英語の読解力および論述力を見ているので、二次試験では、口頭で意見を述べる力を見ることと、今後英米学科で学習していく上での適性を判断することがポイントとなったが、合格者はいずれも高い能力と適性を示していた。一次試験では下位で合格となっていた人でも二次試験で逆転して合格している例も見られるため、二次試験合格のためにもよく準備して臨むことが大切である。

## ◆ 外国語学部国際関係学科 AO入試

### <出題の意図・ねらい>

一次選考の小論文は、日本の移民受け入れについて、消極的・積極的のいずれかの立場から、自分自身の見解を示す問題であった。課題内容を正確に把握し、論理的に思考し、それを正しい文章で表現する力を問うた。

二次選考では、自己推薦書に加えて、集団討論と個別面接を行った。集団討論は、1次選考の小論文テーマを踏まえた課題を素材として5名ずつのグループで討論を実施し、自分の意見を論理的に表現する能力、他者の意見を正確に理解し、適切なコミュニケーションをとる能力を問うた。個別面接は、本学科で何を学びたいのか、それに向けて準備していることは何かといった問いを投げかけ、受験生の知識と意欲を確認した。

## <答案の特徴と傾向>

一次選考

一次選考・小論文の問題は新聞やテレビでも目にする機会の多いテーマだったため、比較的よく書けている答案が多かった。しかしながら、論理的一貫性に欠けるもの、誤った事実関係に基づき立論しているものも散見された。一部の答案には誤字・脱字も見られた。

## <集団討論と面接の特徴>

二次選考

一次選考・小論文の内容に即した課題に従って、集団討論を実施し、その結果も踏まえて個別面接を行った。集団討論では、おおむね活発な議論が行われたが、ところどころで独りよがりな意見やときどきの論題からずれた発言も見られた。個人面接では、十分に準備をしている受験生は多かったが、集団討論の内容を客観的に捉えられている受験生が少なかった。

## ◆ 地域創生学群 AO入試

### <出題の意図・ねらい>

地域創生学群における今年度のAO入試では、一次選抜において、模擬授業を聴講して作成するレポート課題を行いました。二次選抜では、集団面接としてグループディスカッション、個別面接では一次選抜における模擬授業の振り返りと、志望動機、地域創生学群の取り組みに対する理解を伺う内容としました。

これらの出題の意図・ねらいは、地域創生学群に入学してから求められる基礎学力、コミュニケーション能力、共同・協働性、経験から学ぶ力、そして地域創生学群で学びたいという意欲を十分に持っており、自分の言葉で表現することができるか、あるいはその可能性を秘めているのかということを確認する点にありました。

### <答案の特徴と傾向>

一次選考

一次選考では、歩くことからまちづくりを考えるというテーマで模擬授業を展開しました。地域創生を考える上で、歩くことは、その地域の特徴や課題を把握する手法としてかせないものであり、また、歩くことは、人々の健康増進、コミュニティ形成などにつながります。そのため、大学で地域創生を学びたいと考えている高校生にとっては、コースを問わず、必須の知識であることから、模擬授業の内容としてふさわしいと考え実施いたしました。

具体的な内容としては、まち歩きの歴史をたどりながら、まちを歩くことの意義について考え、次に、まちづくりの歴史を紐解きながら、まちづくりと歩くことの関係について触れ、最後に、これからのまちづくりにおける歩くことの果たす役割について解説しました。

レポート課題では、模擬授業において、講師が解説したまちづくりにおける歩くことの果たす役割について論述するという内容でした。例年の課題の傾向と若干異なっていたこともあり、課題に的確に対応した答案は多くはありませんでした。一方で、模擬授業全体をまとめた答案が多くみられ、中には模擬授業では触れていない内容について記述した答案などもあり、こういった答案については、評価を低くしました。文字数が極端に少ない、誤字脱字が多いレポートについても、減点対象としました。



## 二次選考

二次選考では、集団面接と個別面接を実施しました。集団面接ではグループで順次二つの課題に取り組んでいただきました。一つ目は「地域の人口減少が生じている原因や背景」について検討していただき、ロジック・ツリーを作成していただきました。二つ目は、最初に作成したロジック・ツリーを参考に、「地域の人口減少」をくい止めるための方策について話し合ってもらいました。一次選抜の模擬授業の感想や、志望動機、地域創生学群に対するイメージをお伺いしました。

集団面接では、多くの受験生がコミュニケーション能力を発揮し、チームとして課題に取り組むことができていました。二次選抜の対象となった受験生の大半がAO入試指定事業に参加した経験があり、個別面接を通して地域創生学群の理念や考え方について正しく理解できていることが確認できました。しかし、そのような中でも、与えられた情報を整理しつつ、他のメンバーと上手くコミュニケーションをとることが出来なかったり、あるいは地域創生学群に対する理解が低かったり、学びについて明確な意欲を持つことができていないと思えるような受験生もいました。このような受験生については、大きく減点対象としました。